

日本人の姓名の英語表記順に関する調査と考察

今村 洋美

A Survey on the Order of Japanese Surname and Given Name in English

Hiromi IMAMURA

Abstract

Naming practices for the order of surname and given name vary by culture. As Japan became more westernized in the Meiji era, Japanese people came to use given name before surname, and the practice has become prevalent. In 2000, the Council on the National Language of the Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology published a report that recommends that the surname should appear first. However, it seems that many Japanese people still continue to use “given name-surname” order even in 2022. Therefore, a questionnaire survey on the order of Japanese surname and given name in English was conducted on 180 students and 2 teachers, and the results were analyzed and discussed.

キーワード：日本人の姓名、英語表記順、学生アンケート

Key words: Japanese name in English, order of Japanese surname and given name in English, questionnaire for students

1. はじめに

著者は1991年から本学で専任教員として英語を教え始めて、今年で32年となる。この間、授業などで学生に英語で自己紹介をしてもらう際など、1990年代は自分の名前をHiromi Imamuraのように「名—姓」の順で述べる学生がほとんどであった。しかし2000年以降、少しずつではあるが、英語でも「姓—名」の順で自分の名前を述べる学生も見られるようになってきた。

本学の全学共通教育科目のスキル教育科目の「英語スキルI/II」で、2014年度から使用している共通テキスト *Discoveries: Strategies for Academic Reading* のChapter 2に“Which Name Should Come First, Family or Given?”という「姓—名」の順について考える内容が掲載されている（大門他 2013: 37-44）。そして、この章のPre-reading Questionsの1つに、“Do you think Japanese people should put their family names first or last when writing in roman letters?”という質問があるが、“I think Japanese people should put their family names first.”と「姓—名」の順を支持する学生の割合は毎年2-3割である。

そこで本稿では、日本人の姓名の英語表記順に関する歴史的背景について振り返るとともに、本学の学生に日本人の姓名の英語表記順に関するアンケートを実施し、日本人の姓名の英語表記順についての現状について考察したい。

2. 日本人の姓名の英語表記順に関する歴史的経緯

日本人が初めて英語に接したのは、1600年にイギリス人三浦按針（William Adams）が九州・豊後の海岸に漂着し、徳川家康に重用された時と考えられている（大谷 2017: 128）。しかし、日本で英語が組織的に学ばれるようになったのは、幕末の19世紀以降のことである。

1853年には、アメリカ合衆国の東インド艦隊司令長官マシュー・ペリー提督が鎖国を続けていた日本に來航し、開国を要求。翌1854年に日米和親条約が結ばれて以降、英米両国との交渉の機会が増し、英語がオランダ語に代わって重要な外国語になっていった。

日を追って高まる英学に対する需要に応え、1859年に堀達之助らが幕府の命を受け英和辞典の編集にとりかかった。そして、1862年に、『英和對譯袖珍辭書（えいわ たいやく しゅうちん じしょ）』（A Pocket Dictionary of the English and Japanese Language.）という日本初の英和辞典が発行された。堀達之助は、この辞書の序文の最後に、HORI TATSUNOSKAYと、自分の名前を「姓一名」の順に書いている（新城 1996: 61-69）。

しかし、明治の欧米主義の時代になると、本来の形式を逆転して「名一姓」の順とする慣習が欧米の人名の形式に合わせて定着し、その慣習が広く根づいていった。

3. 国語審議会における「姓名のローマ字表記についての考え方」

2000年に文部科学省の国語審議会で、「国際社会に対応する日本語の在り方」について答申が出された。その「三. 国際化に伴うその他の日本語の問題」の2つ目に、「2 姓名のローマ字表記の問題」について述べられており、「(2) 姓名のローマ字表記についての考え方」について、次のように明記されている（国語審議会 2000）。

…国語審議会としては、人類の持つ言語や文化の多様性を人類全体が意識し、生かしていくべきであるという立場から、そのような際に、一定の書式に従って書かれる名簿や書類は別として、一般的には各々の人名固有の形式が生きる形で紹介・記述されることが望ましいと考える（下線著者による）。

したがって、日本人の姓名については、ローマ字表記においても「姓一名」の順（例えば Yamada Haruo）とすることが望ましい。なお、従来の慣習に基づく誤解を防ぐために、姓をすべて大文字とする（YAMADA Haruo）、姓と名の間にコンマを打つ（Yamada, Haruo）などの方法で、「姓一名」の構造を示すことも考えられよう。今後、官公庁や報道機関等において、日本人の姓名をローマ字で表記する場合、並びに学校教育における英語等の指導においても、以上の趣旨が生かされることを希望する。

ちなみに、文化庁が1999年に実施した「国語に関する世論調査」で、英文における日本人の姓名表記について尋ねたところ、「「姓一名」の順で通すべきだ」（34.9%）とした人がやや多く、「「名一姓」の順に直すのがよい」（30.6%）、「どちらとも言えない」（29.6%）もこれに拮抗する結果となったとしている（国語審議会 2000）。

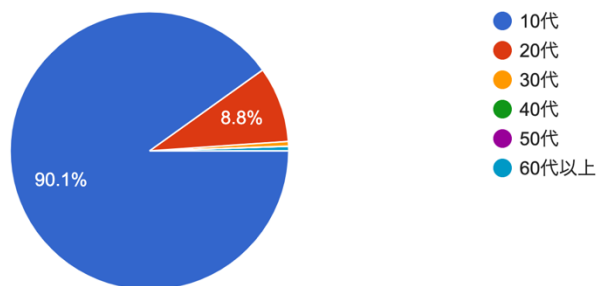
4. 日本人の姓名の英語表記順に関するアンケート

2022 年 4 月から 5 月にかけて、本学の学生 1-2 年生 180 名と英語教員 2 名の合計 182 名に、自分の名前を英語で表記する順について、Google フォームを使用したアンケートを実施した。アンケート項目は、1.「回答者の年代」、2.「英語で自分の名前を言う順番」、3.「2 を選んだ理由」の 3 項目である。3 の項目では、a.「日本語の順番（姓+名）に合わせて」、b.「英語圏の順番（名+姓）に合わせて」、c.「学校でその順番を使うよう習ったので」の 3 項目は明記し、「その他」の項目で自由記述ができるようにした。また 3 は複数選択可とした。

4.1 アンケート結果

アンケート結果はそれぞれ以下の通りであった。

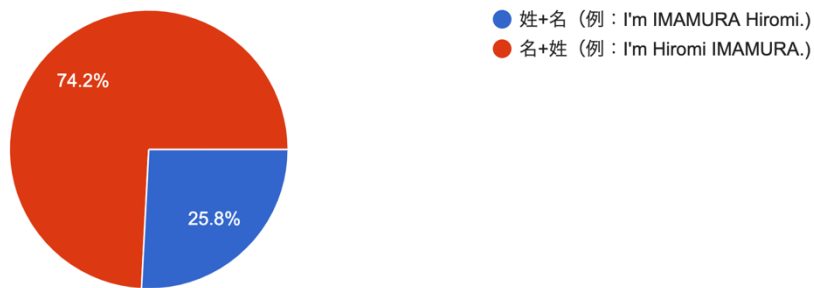
図 1. 回答者の年代 (N=182)



10 代 (164 名) 90.1%、20 代 (16 名) 8.8%、30 代 (1 名) 0.5%、60 代 (1 名) 0.5%

今回、自分の名前を英語で表記する順についてのアンケートを実施したのが、2022 年 4-5 月だったこともあり、回答者の年代の 9 割を占めたのが大学に入学したばかりの 1 年生と 2 年生からなる 10 代後半の 164 名 (90.1%) であった。残りは、20 代の学生 16 名 (8.8%) および 30 代と 60 代の英語教員各 1 名 (各 0.5%) であった。

図 2. 英語で自分の名前を言う順番 (N=182)

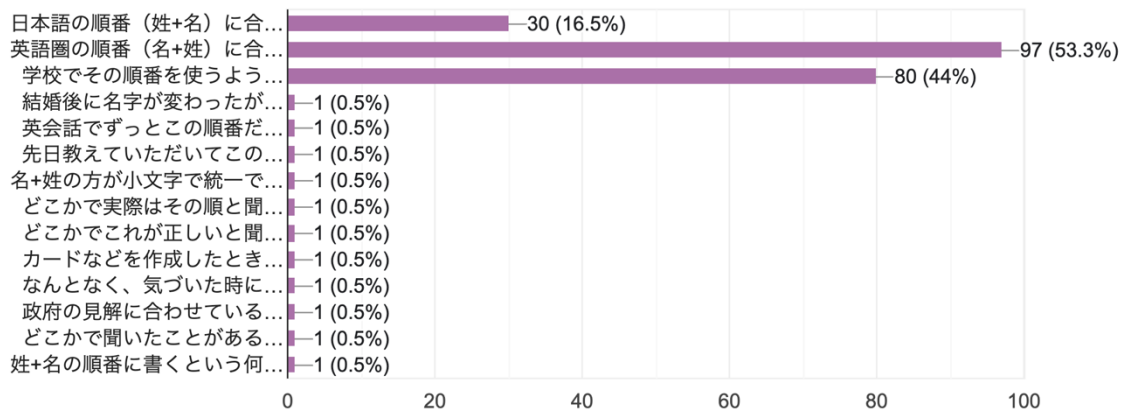


2-1 姓+名 (47 名) 25.8%

2-2 名+姓 (135 名) 74.2%

英語で自分の名前を言う順番を「姓—名」と回答したのが 47 名 (25.8%) と、全体の約 4 分の 1 にとどまり、「名—姓」の順が 135 名の 74.2%を占めた。

図 3. 2 を選んだ理由



- 日本語の順番 (姓+名) に合わせて : 30 名 (16.5%)
- 英語圏の順番 (名+姓) に合わせて : 97 名 (53.3%)
- 学校でその順番を使うよう習ったので : 80 名 (44%)
- 結婚後に姓が変わったが、ファーストネームは生まれてからずっと一緒に先に言いたいので : 1 名 (0.5%)
- 英会話でずっとこの順番だったから : 1 名 (0.5%)
- 先日教えていただいてこの順番に変えた : 1 名 (0.5%)
- 名+姓の方が小文字で統一できるから : 1 名 (0.5%)
- どこかで実際はその順と聞いたことがあるから : 1 名 (0.5%)
- どこかでこれが正しいと聞いた気がするから : 1 名 (0.5%)

- j. カードなどを作成したときにそのようにしたから：1名（0.5%）
- k. なんとなく、気づいた時にはこの順番だった：1名（0.5%）
- l. 政府の見解に合わせているから：1名（0.5%）
- m. どこかで聞いたことがある気がするから：1名（0.5%）
- n. 姓+名の順番に書くと言う何かの記事を見たから：1名（0.5%）

2を選んだ理由は複数選択可能としたため、2で「姓一名」と回答した47名中、a.「日本語の順番（姓+名）に合わせて」を選んだのが30名で、残りの17名は、c.「学校でその順番を使うよう習ったので」やその他の理由を選んでいる。同様に、2で「名一姓」と回答した135名中、b.「英語圏の順番（名+姓）に合わせて」を選んだのが97名で、残りの38名もc.「学校でその順番を使うよう習ったので」やその他の理由を選んでいる。その他の自由記述は、すべて1名ずつの理由であった。

5. 考察

文化庁が1999年に実施した「国語に関する世論調査」では、英文における日本人の姓名表記について尋ね、「姓一名」の順で通すべきだ（34.9%）とした人がやや多く、「名一姓」の順に直すのがよい（30.6%）、「どちらとも言えない」（29.6%）という結果であった。これと一概に比較はできないが、今回2022年に本学の学生に実施したアンケートでは、英語で自分の名前を言う順番を「姓一名」と回答したのが47名（25.8%）と全体の約4分の1にとどまり、「名一姓」の順が135名と74.2%を占めるに至った。これは、2000年に文部科学省の国語審議会で、「日本人の姓名については、ローマ字表記においても「姓一名」の順（例えば Yamada Haruo）とすることが望ましい。」という見解が述べられたにもかかわらず、23年経った現在でも、10代後半の大学生が「名一姓」の順を好んで使用している実態が窺われる。

ちなみに、2022年12月に資格英語B(TOEIC)の授業の一環でTOEIC Listening & Readingテストを実施した際も、マークシートの氏名欄に、（ローマ字で姓□名の順序）で書くよう指示がされているのにも関わらず、何人かの学生は「名□姓」の順で書いてしまい、テスト結果が返却された際に、「名□姓」の順で書いてしまった学生のスコアデータを探すことに時間を要したことがあった。このことも、無意識に自分の名前を「名一姓」の順に書いてしまう学生が少なからずいたことを物語っていると言える。

もちろん、約25%の学生は、「姓一名」の順を使用しており、その理由として、a.「日本語の順番（姓+名）に合わせて」やc.「学校でその順番を使うよう習ったので」を選び、l.「政府の見解に合わせているから」やn.「姓+名の順番に書くと言う何かの記事を見たから」と言う理由を挙げた学生もあり、少しずつではあるが、文部科学省の見解が浸透していることも窺うことができる。

「名一姓」の順を選んだ理由だと思われる中で、j.「カードなどを作成したときにそのようにしたから」と言う理由があった。クレジットカードなどでは、「名一姓」の順が定着しており、国語審議会(2000)にも「一定の書式に従って書かれる名簿や書類などは別」と「名一姓」の使用も認めている。このクレジットカードでの「名一姓」の順は今後も使い続けられる可能性が高く、この影響で自分の名前を「名一姓」の順で記す日

本人も一定数を占め続けるであろう。

「名—姓」の順を選んだ中に、d.「結婚後に姓が変わったが、ファーストネームは生まれてからずっと一緒に先になりたいので」と言う理由もあった。日本では結婚後、一方が配偶者の姓に変更しなければならないため、英語圏の「名—姓」の順であれば、結婚後変更しなくて済む「名」から先に言うことができる、という理由も興味深い。

ただし、今回のアンケートでは、2を選んだ理由を細かく分類して回答してもらうことがなかったため、例えば、3の項目c.「学校でその順番を使うよう習ったので」の80名(44%)の中に、「姓—名」と「名—姓」を回答した人の理由が混在してしまった。よって、「姓—名」を選んだ人の理由と「名—姓」を選んだ人の理由を分けたアンケートに設定すれば、より明確な結果が得られたと思われる。今後、アンケートを取る際には、この点に気をつけて設定していきたい。

6. おわりに

今回は、日本人の姓名の英語表記順に関する歴史的背景について振り返るとともに、本学の学生 180 名および英語教員 2 名に日本人の姓名の英語表記順に関するアンケートを実施し、日本人の姓名の英語表記順についての現状について考察してきた。

2000 年に文部科学省の国語審議会で、言語や文化の多様性をふまえ、日本人の名前のローマ字表記においても「姓—名」の順が望ましいとの答申が出された。ただし、強制力はない。それから、22 年経た今回のアンケートでは、約 75%の学生が、自分の名前を英語で表現する際に、いまだに「名—姓」の順を用いると回答した結果が出た。

2023 年の現状をみると、身近なところではクレジットカードも「名—姓」の順番である。また、アメリカの大リーグで活躍している大谷翔平選手も、日本発の複数の英字新聞でも Shohei Ohtani と紹介されたり、2022 年 2 月に開催された北京オリンピックのメダリストたちも、Ryoyu KOBAYASHI のように「名—姓」の順で掲載されている(Japanese Olympic Committee 2022)。企業でも、グローバルにユニクロなどを展開するファーストリテイリングなどでは、役員名簿などで「名—姓」順を採用している。

ただ、中部大学の website の英語版の faculty には、「姓—名」の順で名前が掲載されたり、NHK の番組で日本人の名前が「姓—名」の順で書かれている番組も増えてきている。

ますます海外との交流が盛んになる中、私たち日本人が自分の名前を英語で述べたり表記する際、どの順をどの場面で使用していくことになるか、今後も注視していきたい。

謝辞

アンケートを Google フォームで作成する際など、アドバイスをくださいました中部大学語学教育プログラム(英語)加藤由崇准教授にこの場をお借りしお礼申し上げます。

参考文献

大門正幸・David Laurence・Cameron Smith (2013). *Discoveries: Strategies for Academic Reading*. 金星堂.

- 大谷泰照 (2017). 「日本英学事始」 酒井志延・朝尾幸次郎・小林めぐみ (編) 『社会人のための英語の世界ハンドブック』, 128-129. 大修館書店.
- 国語審議会 (2000). 「国際社会に対応する日本語の在り方」 (2000 年 12 月 8 日)
https://warp.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/11293659/www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_bunka/kokugo_index/toushin/attach/1325316.htm (最終閲覧 2022 年 11 月 21 日)
- 新城岩夫 (1996). 「堀達之助他編『英和対訳袖珍辞書』の日本英学における役割についての一考察」 『言語文化研究』 中部大学女子短期大学紀要 7, 61-73.
- Japanese Olympic Committee (2022). *Japanese Medalists in Beijing 2022 Olympics*.
https://www.joc.or.jp/english/beijing_winterolympics/medalists.html (最終閲覧 2023 年 1 月 5 日)